
.D. - カンパインティングドウコウカイ - ちょっと前のお話 【三語即興文】

和波智淳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K・P・D・ - カンバンペインティングドウコウカイ -

ちよつと前のお話 【三語即興文】

【Nコード】

N6428E

【作者名】

和波智淳

【あらすじ】

ある夏の日、大学生のミノルに起きる運命の出来事……などという大袈裟な話ではありませんが。「蝉」「青空」「グラウンド」をお題とした三語即興文でしたが、制限時間30分のはずが、完成まで4時間半くらいかかってしまいました。

じーわじーわじーわ……蝉が鳴いていた。

「こんなに暑くなるなんて聞いてないよお……」

キャンパス内の道の端を歩きながら、連れもないのに実は思わ
ず咳いていた。一人暮らしを始めてから、どうも独り言の癖が付い
て困っている。

しかし、そんな独り言でも言わなければ確かにやりきれない暑さ
だった。実は半袖シャツの上に襟付きのシャツを羽織っている。真
面目な性格が、大学内でくだけた服装をすることを許さないのだ。
それでも、だんだん暑くなる時期であることを見越して、なるべく
薄いシャツを選んで重ねてきたのだが……今日ばかりは、日中の気
温の変化に対する見込みが甘かったとしか言いようがない。

「実家うちよりも北だと思ってたのに……」

実の恨み言は一応正しい。確かに、実が入学した春先からついこ
の間までは、実家のある地方よりも肌寒かった。外出の際には上着
が欠かせず、室内でも暖房器具なしには過ごせなかったのだ。

だが、てつきり一年中そんな気候だと思ったのが間違いだった。
見上げれば、白い雲にところどころ覆われてはいるが、くつきりと
した青空。教科書・筆記用具・その他もろもろの荷物がいつぱいに
詰まったリュックサックを間に隔てても、なお実の背中をじりじり
と照りつける陽光。おまけにじーわじーわとフライパンの上で焦げ
る何かのような蝉の声。……暑い。ものすごく暑い。

重たい荷物を背負っているせいもあって、実はついつい背を丸め
がちになる。だが、そうするとしたら流れる汗が眼鏡の下の目に
入って鬱陶しい。それだけでも充分嫌なのに、これからテストだと
いうことを思うと、本当にこの暑さは嫌になる。まあ、教室には冷
房が入っているのが唯一の心の支えだが。

俯いて歩いていた実の目の先に、細長い脛すねが飛び出した。

「……わっ」

ぎよつとして実は立ち止まった。向かって左側、校舎のある方向から飛び出したその脛は、よく日焼けした薄茶色で、脛毛はない……が、筋肉のつき方は明らかに男だ。やっとそれだけ見分けた時、実の頭の上から声がした。

「あーもー、危ないな……。……つて、君、ミノル君やんか。何してるん？」

実が視線を上に向けると、つんつん逆立った茶髪と、横長のふちの太い眼鏡が視界に入った。見覚えのある顔だ。全学共通の講義のあちこちで一緒になる。たまに言葉を交わしたこともある。ということは同じ一年生だが、確か向こうは医学部だったはず。背の高い痩せた体に白い柄入りのシャツを着て、帆布のカバンを肩から斜めに下げ、小洒落たハーフパンツを履いている。先ほど見たとおり、脛毛はない。おそらくは処理しているのだろうが。

「あ、君は……。ええつと……」

「郁夫イクオでええよ。君、文学部やったっけ？」

実が相手のことを覚えている以上に、向こうは実のことをよく覚えていたらしい。ぶつかりかけたせいか、表情は不快そうだったが、態度はずいぶん馴れ馴れしかった。実がうなずくと、郁夫は暑苦しそうにミニタオルで顔の汗を拭った。

「それにしても暑いな。そんな俯いて歩いてると、汗が目えに入るぞ」

「……もう入ってるつて」

「ははあ、それか。そんな気分悪そな顔してたんは」

「いや……。五コマ目、テストあるから……」

自分はそんなに気分が悪そうな顔をしてただろうか、と思いつながら実が答えると、郁夫は尖った顎に手をやり、すぐににやりと笑った。

「はあ……。それで前かがみやったんやな。まあ、俺もやけど」

「えっ……。そうなの？ どの授業？」

郁夫の意味ありげな笑い方には気づかず、実は問いかけた。必修の講義や受講者の多い講義は四コマ目までにあるのが普通で、日の最後のコマである五コマ目の講義となると、かなり数が限られてくる。だから、ひよつとしたら……と思っただが。

「キャンパスライフ総合」

「あれ……？」

実は首を捻った。郁夫が言ったのはどんぴしゃり、これから実がテストを受けるのと同じ講義だったからだ。それなりに教室も広く人数も多い講義だが、何度も同じ教室で過ごせば、自分の他にどんな人間が出ているか、何となく分かってくる。同じ講義に出る人間の顔くらい、見れば気がつくつもりでいたが、正直、その講義では郁夫を見た覚えはない。

悩む実の心中を読んだように、郁夫が言った。

「あー、そーゆーたら君も出てたかなあ。あんまり覚えてへんけど」

「えっ？ でも、君は……」

「サボってた」

「えっ……」

絶句した実に、郁夫は実に当然だという顔でしゃべった。

「前の時間がなあ、別のキャンパスの授業なんやけど、これがまたよう時間延びる授業なんやわ。そんなんなったら、もう、めんどいやんか、わざわざキャンパス移動して五コマ目やで」

「け、けど……」

郁夫の言うことも分からなくはない気がしたが、今のところどの講義にも真面目に出席している実には、なかなか聞き捨てならない話のように思えた。そもそも、そんなにサボってばかりいて、これからやるテストにまともに対応できるのだろうか？

しかし、郁夫はいかにも自信ありげに笑った。

「だーいじょぶやて。他にきっちり出席しとる奴からノート見せてもろてるさかい。ばっちりヤマも掛けてきたしな」

「それもどうかと思うけど……」

「ん、何か言った？」

「いや別に……」

実は何となく郁夫と反対の側に目をやった。話す間に二人は歩き出し、いつしか目的の教室のある校舎の近くまで来ていた。道路を挟んで校舎の向かい側には、小さなグラウンドが広がっている。実の目に入ったのはそのグラウンドだ。四コマ目までで講義が済んだのか、もうグラウンドに出て、部活の練習やら試合やらを行っている人たちの姿が見えている。この暑いのに元気だなあと室内派の実はつくづく思った。

だが……グラウンドの向こうから、こちらに向かって凄まじい勢いでやってくる、あの土煙はいつたい何なのか？

「ほー……ほー……っ！」

どどどどどどどどどどどどどど。

何かが走ってくる。いや、何かではない、人だ。それは分かる。

だが、人として 少なくとも、このキャンパス内にいるべき風体の人間として、それを認識することを実の頭が拒んでいる。

黒いぼわぼわの毬を乗っけているようなアフロヘア。その下の顔は毬に突き刺さるゴボウのごとく細長い。体も木の枝のように細長く、ごつく、色黒。着ているのはどこかのチームのユニフォームらしき真っ赤なタンクトップとハーフパンツ。ご丁寧な腹の真ん中に「88」の番号入り。背中には、そこだけは異様に学生らしい薄っぺらい黒いカバンを背負っている。

「ちよちよわー……っ！」

実と郁夫が呆然と見守る前で、「それ」はグラウンドを走りぬけ、試合をかき乱された選手たちを置き去りに、まっしぐらに校舎へ駆け込んでいった。それも、実と郁夫が目指していた、次のコマの講義を行う教室がある棟へと。

「……何、あれ？」

「それ」が校舎の中に消えてしばらくたって、やっと、照りつける日差しも忘れて呆然と立ち尽くしていた実が呟いた。

「……うーん……。まあ、言うところの、『我が校の名物』みたいなものと違うかなあ」

同じく呆然と立ち尽くしていた郁夫が腕組みして答えた。「我が校の名物」など初耳だった実は思わず郁夫を見上げた。

「あれが？」

何や知らんのかいなという顔で郁夫は実を見下ろした。

「全学の授業で一緒にならんかったんか？ あいつも確か、俺らと同じ一年やで」

「ええっ？ で、でも……」

「ミノルが知らんいうことは……あいつも授業サボつとつたな」

苦笑いするように顔をゆがめて、郁夫は、謎の人物が走り込んで行った校舎を見やった。

「まあ見ててみ。たぶんあいつも……俺らと同じテスト受けるんじゃないかと思うから……」

何でそんなことが分かるのかと思いつながら郁夫の顔を見上げた実も、何やら奇妙な予感を覚え、困ったような顔で教室の方角を見つめた。

やがて、涼しい教室に入った二人は、郁夫の予言どおりその前の席にアフロの人物の姿を発見し、さらにテストのための出席取りで、それが工学部一年の雄二ユウジという者であることを知り、おまけにテストの間中、前の席に揺れるアフロが目に入るたびに、彼に対するあまたの疑問に悩まされる羽目となるのだが 翌年の春、雄二を含めた彼ら三人が新たな同好会を立ち上げることとなるうとは、当然ながらまだ知るよしもないのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6428e/>

K.P.D. - カンバンペインティングドウコウカイ - ちょっと前のお話 【三語即興】

2010年10月8日15時20分発行